

ロボット社会の光と陰
The Light and Dark in a Society of Robots

柴田正良
Shibata, Masayoshi

金沢大学人文学類，金沢市
School of Humanities, Kanazawa University, Kanazawa

Key words

Physical Functions, Psychological Functions, Doppelgänger, Amalgamated Selves, Evolution

何のためのロボットか（願い）

ロボットは何のためのものか？ それは考えるまでもない。ロボットはそもそも人間が作ったのだから、人間の不足を補うためのものだ、というのがその答えだろう。しかし、人間の不足とは何だろうか。

人類のあらゆる発明は人類の欲求（もしくは願望）に根ざしているのだからロボットも例外ではなく、「不足」というのは、人間の欲求を満足すべきさまざまな機能の「不足」に違いない。ところで、「不足」ということには、少なくとも、個々の人間に自然に備わった機能の損傷ないし劣化という意味と、個々の人間の正常な機能に対する不満という意味の2つがあるだろう。さらに、人間は非常に大ざっぱに言って、心と身体という2つの次元に渡って存在しているのだから、「機能」もまた、心的機能と身体的機能の2つに分けて考えることができる。つまり、この4つの機能補償・機能拡張の組み合わせ（以下のカテゴリー(1)～(4)）に応じて、ロボットは作成されるのが本筋である。だが、それは、人間の身体そ

のものの部分的機械化であるようなサイボーグとは異なったものだ。ロボットは、あくまでその恩恵を受ける人間とは別の個体、別の存在だからである。

以下では、このような存在としてのロボットが、人間の良き下僕から、やがて人間の人格やアイデンティティを脅かす＜人間の分身＞となり、ついには人間がロボットに乗り移ることを望むようになる、というシナリオを想像してみよう。いわば生活ロボットから憑依ロボットへの変身だが、これは、もしかすると、人間のサイボーグ化と別の道を辿る＜人間の完全な機械化＞という進化の第二ステージかもしれない。しかし、私にかいま見えるロボット社会のこのダーク・サイドは、ロボットたちがアシモフの3原則に逆らうようになり、自我に目覚めたスーパーコンピュータが人類を襲う、という筋書きではない。

さて、個々の人間の本来の身体機能が弱まったためにロボットに支援を頼むというカテゴリ(1)には、典型的には介護ロボットや家事ロボットなどが入るだろう。これらはすでに実用化されているものもあるが、将来、一大産業にまで発展する可能性を秘めていると思われる。これらは、最もロボットの活躍が期待される分野であり、おそらく洗濯機や掃除機といった家電製品の導入と連続的な感覚で人々はロボットを受け入れるだろう。しかし、それよりも今後重要になってくるのは、心的側面での機能の衰えを補完するようなカテゴリ(2)のロボットたちかもしれない。とくに現在「癒し系」と言われるような、ペットに似た姿を持ったプリミティブな感情表現を行うロボットたちは、痴呆老人に対するケアの手段として有効なものだという評価を得つつある。心的機能の欠損や衰退を補うという意味では、むしろ、記憶や推論や知覚といった機能不全をカバーしてくれる、必ずしも人型や動物型でないロボットが将来出てくるかもしれないが、その場合も、音声や画像によるインターフェースとして感情や「人らしい」対応がロボットに強く求められるだろう。つまり、ロボットは人間に似たものであることを運命づけられているように見える。

タンパク質から金属の「私」へ（進化）

上記の分類で言えば、カテゴリ(3)は、現在、個々の人間に正常に備わっている身体機能を超えて、その人にとってより優れた機能をロボットに求めるという動機によって特徴づけられる。しかし、これは、健康な登山家がモビルスーツによって今以上に身体能力を強化し、真冬のエベレストに挑戦するという、いわゆるエンハスメント（能力増強）とは少し異なる。むしろ、その典型は、あくまで自分ではない存在として、人間にない身体能力、例えば、熱や打撃に強いとか、酸素を必要としないといった特長を生かして、燃えさかる火災現場に救助に行ったり、深海を探索したり、宇宙空間で作業したりするロボットたちである。また人間にないというより、自分にはない身体能力および心的能力の実現という点では、性的なパートナーを含めた恋人、友人、家族などの代わりとなる対人専用ロボッ

トも、ロボット社会において重要となりうる存在だろう。また、そんなに華々しくも妖しく(?)もないところでは、自分の代わりに草野球でホームランを打ってくれる代役ロボットも、ここに入れていいかもしれない。

こうしてみると、「人間の能力を超えた機能」ロボットというのは、一言でいえば、個人のその時々状況の限界をはみ出した願望を満たすために、その人の正常な能力以上を求められるようになったロボットである。これを、一括して、われわれの<分身>ロボットと言うのは、誤解を招くであろうか。確かに、恋人や家族の代役は自分の<分身>ではない。しかし、それらは、恋人や家族の<分身>であることを求められているのだ。So far so good. ここまでは一見した限り、われわれの社会は、多くの有能なロボットたちと豊かな共存生活をおくっているように見える。

しかし、これらの異形であってもいいロボットたちの多くが、人間と見分けのつかない姿形をするようになるのはごく自然なことである。というか、対人専用ロボットは、そのような姿形の<分身>でなければ、われわれの十分な役には立たないだろう。すると、まもなく、ロボットたちの譲渡、破棄、破壊だけでなく、記憶の脱着可能性や恒久的保存性、存在の複数性と永遠性などが、われわれ自身のアイデンティティの問題として跳ね返ってくるのは間違いない[1]。われわれにしたって、物理的存在である以上、原理的には、いかようにでも顔かたち、四肢や脳の中身さえも「改良」できるのだ[2]。そこで例えば、こうしたロボットたちにどこまで人格を認めるのかが、きわめて困難な概念的、制度的な問題となろう。われわれの反応はさまざまだろう。だが、そのうちで私が注目したいのは、われわれもその人型の<分身>ロボットのように、完全な機能体のままに<不老不死>でありたい、という願いである[3]。

こうしてわれわれは、カテゴリ(4)の段階に導かれる。この最後のカテゴリは、人類がこれまでの進化の過程で獲得してきた心的能力を超える能力をもつロボットたち、ということの意味する。この段階のイメージをつかむために、<分身>から<憑依>への場面を想像してみよう。すでに今現在ですら、私の日常用いるパソコンから、私の読むニュース、好むサイト、頻繁に取り上げるテーマ、買う本の傾向などをデータ化することができる。私が何かを検索したり、論文を書こうとするとき、そのパソコンの内容を用いて私を分析し、私が求めるのに最適な支援を行ってくれるインテリジェント・ロボットができるなら、それは、やがて私の思考傾向や価値判断を取り込んで、私の代わりにメールのやり取りくらいはしてくれるだろう。しかし、それが私の<知的な分身>に近づけば近づくほど、私はきっと自分の原稿をそのロボットに書いてほしいと思うようになるだろう。もちろん、それは<他の誰か>の論文ではなく、<自分>の論文でなければならない。そうでなければ、それは私にとって嬉しくも何ともない、一種の盗作行為に等しいからだ。

しかし、それぞれの人の個性を保ちながら、それぞれの人よりも優れた心的能

力を持つロボット，その中には年をとっても衰えない音楽や美術の技能を維持しながら，さらに芸術的着想の豊かなパフォーマンスを可能にするロボットも含まれるだろうが，そういったロボットたちが出現したとき，われわれはそれらを自らの<分身>として愛でるのではなく，それらに乗り移り，そうしたロボットになりたい，と思わないだろうか．それは単に，自分の分身の不老不死ではない．自分自らの不老不死である．考えてみれば，人類は，例えばドーキンスの言う「原始のスープ」の昔から遺伝子をタンパク質の鎧でくるみ，そのタンパク質を変形させることで<私>を進化させてきた．しかし，ことここに至り，われわれはタンパク質を脱ぎ捨て，遺伝子さえもうち捨てて，金属の身体と電子の脳によって<私>の進化の第2ステージに向かうのではないか．その時，人間は，存在のこの異様な変容を前にしても，不老不死の誘惑に抵抗することはできないのだろうか．それが望ましいことであろうと，あるいはおぞましいことであろうと・・・

参考文献：

- [1] 柴田正良，“ロボットの心”，pp.225-243，講談社現代新書，2001.
- [2] マイケル・S・ガザニガ，“脳のなかの倫理”（梶山あゆみ訳），pp.66-126，紀伊國屋書店，2006.
- [3] レオン・R・カス，“治療を超えて”（倉持武監訳），pp.187-241，青木書店，2005.